

# 日中戦争期における奉天市民生活の実態

殷 志 強

## はじめに

本稿は、日中戦争期における奉天市民生活の実態を解明することを課題とする。1937年日中全面戦争の勃発により、「満洲国」（以下カッコ省略）は日本の対中国戦の前線兵站として位置付けられた。特に1941年の太平洋戦争開始以降、日本は総力をあげて英米を初めとする連合国と戦う決意を固めたため、国内の人的・物的・資金などを総動員しただけではなく、台湾、朝鮮及び満洲国もこの戦争に巻き込んだ。従来の研究は様々な側面からその総動員戦を明らかにした。例えばルイズ・ヤングは、「日本は、公式の殖民地機関である関東長官や、満洲国という組織を通じて支配だけではなく、軍事的な脅威・市場支配・現地で日本に協力するエリートの育成などという非公式な手段を用いて、中国東北部の社会生活を支配した」<sup>1</sup>と、日本の支配図式を政府から民間へ浸透のルートで考えた。塚瀬進は、「貿易統制法」、「日満経済建設要綱」、「戦時緊急経済方策要綱」などの法令により日本政府が行っている貿易統制や経済統制の経緯を明らかにした。また新京を例として米の配給量は日本人と中国人では異なっていることを指摘している<sup>2</sup>。田中隆一は『通信検閲月報』を中心に分析し、配給制度と物価の高騰などの側面から戦時下満洲国における朝鮮人の生活様相を検討した。日本人、朝鮮人、中国人による配給物資が異なっており、人々は戦時体制下で物価高や物資不足に苦しんでいたことを指摘した<sup>3</sup>。本稿では、これまでの研究成果を踏まえながら、『日本関東憲兵隊報告集』<sup>4</sup>にある奉天の物価変動や配給状況等に関する資料を分析しながら、日中戦争期、特に太平洋戦争勃発以降の奉天市民の生活実態を考察したい。

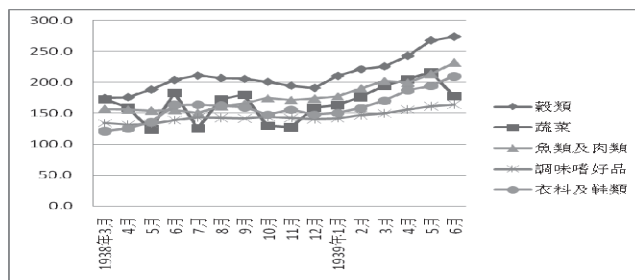
## 一 日中戦争期における奉天の物価の変動

7・7事変勃発の直後、満洲国の物価は直ちに上昇したわけではない。『満洲国現勢—康德8年』により、「事変関係に基づいて一般物資の需給関係の不均衡がまだ表面化していなかったため、満洲国の物価は1937年末までは比較的安定を示していた<sup>5</sup>」という特徴が指摘されている。

ただし、その後、1937年7月17日、蒋介石は廬山で「最後の関頭」という演説を行い、抗日戦争の方針と決意を語った。抗日戦争は局地抗戦から全面抗戦へ発展した。一方、日本軍が「不拡大主義」を放棄し、上海、南京を相次いで占領した。特に1937年12月の南京侵略を契機として、対中戦争は一気に収束できない方向へ進んだ。戦局の長期化と拡大により、物

価の高騰の波は日本国内に止まらず、満洲国にも波及してきた。1938年に入ると物価騰貴の勢いは生産資材から一般消費資材へと伸展し、5、6、7月の3ヶ月連続で上昇した。騰貴率は実に35.3%という高率に達した<sup>6</sup>ので、市場の状況は極めて混乱した。

上述した物価の騰貴は輸出に影響を落とし、予算の執行を阻害し、また国民生活を圧迫するなど一連な悪影響をもたらした。その局面を打開するために当局は、急いで物価抑制政策に乗り出した。同年8月に思惑資金に対する貸出を取り締まる指令を発した。また、戦時物価審議機関として物資委員会や為替投機に対応する為替局などを創設した。さらに、米穀、糧穀、毛皮などに対する管理・統制法を実施した<sup>7</sup>。これらの措置によって物価は1938年後半から一度低落の傾向を示した。図1に表れているように、奉天市の小売物価指数は8月から少し下向しているが、1939年入ると、再び上昇に転換した。その中で、価格の変化がもっとも激しかったものは野菜類であった。乱高下しているが、全体としては、上昇の趨勢を呈していた。

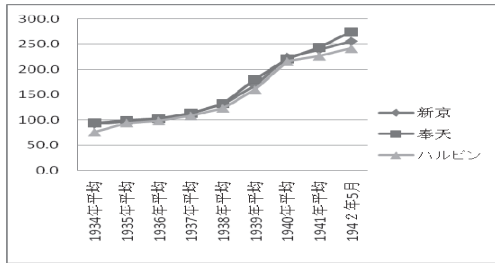


注：国務院総務庁統計處『統計時報』（第3巻第5－8号）より作成。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A06031519600、内閣文庫・殖民地関係統計年報（国立公文書館）。

図1 奉天市小売物価類別指数

満洲国政府が取った措置は物資不足と需要の拡大との矛盾を根本的に解決していなかったため、1939年から戦争終結まで満洲国の物価は右上がりの成り行きを続けていた。図2に示したように、満洲国の三大都市の卸売物価平均指数は1933年を基準として1942年には2.5倍前後に達したことが分かる。特に1938年から1940年までその3年間では物価の高騰のもっとも激しい時期であった。1937年に比べてほぼ2倍に増加した。そのうち、奉天の物価指数は新京や哈爾濱よりやや高かった。

また、一般市民の日常生活に関わる物資は図3のように変化の趨勢を示していた。まず、取り上げたいのは紡績品である。紡績品はほとんど日本からの輸入に依存していたため、真っ先に騰勢をたどり、45%を上昇している。輸入品の高騰は直ちに食糧や雑穀などの農産物に広がった。1939年から農産物が雑穀を中心として騰貴した。1937年から1938まではわずか3%の上昇であったが、その後の増加率は年間60%を超えるという驚異的なスピードで加速し、1940年には平均指数は268.5に達し、ピークとなった。



注：『満洲国現勢』（康徳十年版）、692頁。（1933年平均=100）

図2 満洲三大都市の卸売物価類別指数

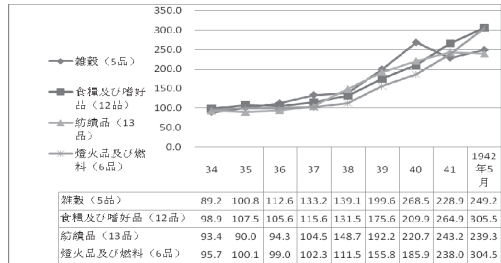
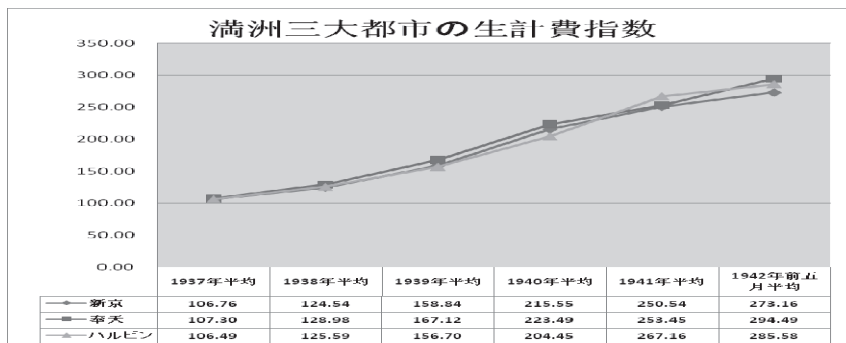


図3 奉天市の卸売物価類別指数

以上、奉天市の卸売物価を簡単に分析した。次に、奉天市の小売物価の変遷を考察しよう。小売物価指数とは、小売取引段階における物価変動を販売側からとらえた物価指数を指している。流通市場の最末端に置かれている小売価格は、卸売物価より市場の環境、投機行為、消費心理等の要素から受ける影響がさらに大きくなるものと考えられる。周知のように、通常の状態に於いては、小売物価は卸売物価に連動し、変動の程度もごくわずかであるが、戦争という深刻な危機になると、その小売物価は驚異的な変動を表す。まず、図4を見よう。

1937年から1942年まで、満洲国三大都市の生計指数はほぼ3倍になった。一番増えた時期は1939年以降の2年間であったが、ここで特に説明したいことは、前述したように1938年8月からの卸売物価が一旦下落したのに対して、小売物価を反映する生計指数は一貫して上昇傾向を辿っていたことである。生計指数高騰の一般的原因としては民需品の供給の減少・交通輸送機能の不円滑化・配給機構の未確立などがあげられるが、特に生活用品には輸入品が多かったため、日本の物価高の影響を見落とすことができない<sup>8</sup>。戦争の長期化により、満洲国と第三国の貿易は相次いで中断され、日本に対する依存度はますます増大した。表1によると、1940年までには、対日貿易は満洲国貿易総額の8割を超え、また対日貿易の入超額も9億円近くに達した。



注：『満洲国現勢』（康徳十年版）、692頁。

図4 満洲国三大都市生計費指数

満洲国は重工業の発展を優先する政策を立てたため、軽工業製品は主に日本からの輸出に依存していた。従来日本の対満貿易は満洲から原料や農産物を安く輸入して、日本よりはるかに割高な工業製品などを満洲へ輸出していたことは周知の事実である。しかも戦時下において「対日輸出協定価格」もあるので、そのシェーレはさらに拡大した。要するに、日本からの輸入品は大幅に値上がりすると同時に、日本に対する依存も強まった。これらが奉天の生活品価格騰貴のもっとも根本的な要因だと考えられる。

表1 満洲国歴年貿易総額と対日貿易の割合

年次	輸出	輸入	合計	日本に対する輸出	日本に対する輸入	総額	比率%
1936	602,758,989	691,830,312	1,294,589,301	237,508,643	507,324,215	744,832,858	57.53
1937	645,297,656	887,411,696	1,532,709,352	277,087,993	627,229,748	904,317,741	59.00
1938	725,454,449	1,274,747,601	2,000,202,050	367,706,593	936,321,117	1,304,027,710	65.19
1939	834,717,045	1,816,123,952	2,650,840,997	521,324,356	1,540,755,960	2,062,080,316	77.78
1940	544,629,409	1,397,716,029	1,942,345,438	378,445,698	1,241,483,913	1,619,929,611	83.40

注：『満洲国現勢』（康徳八・九・十年版）、「貿易総額累年比較」「国別輸出入額」より作成。  
（備考：1、經濟部調査。2、1940年は1月以降9月までの累計、その後発表中止。）

以上、満洲国特に奉天市の小売物価や生計指数の変動から市民生活を概観した。戦時下における物資の深刻な欠乏と日満貿易のシェーレは奉天市の物価高騰の要因であると考えられる。当時日満当局は物価の高騰に対する対応措置としてさまざまな法令の発布、委員会や組合の創設ないし配給制度の実施を行った。次第に自由経済から嚴重な経済統制に変容した。しかし、その供給と需要の不均衡を根本的に解決しなければ、物価の騰貴を抑えることは無理であろう。ただ以上のような満洲政府が公表されたデータから見ても、当時の物価上昇の勢いに驚かれるが、実際の状況はこれより何倍も深刻であったことが『日本関東憲兵隊報告集』から窺える。

## 二 『関東憲兵隊報告集』と奉天市民生活の実態

太平洋戦争の勃発により、戦局が一気に変化し、軍需に調達される物資も当然多くなった。このため、奉天における物価はさらに上昇した。特に総人口の絶対多数を占めている満系人は配給差別を受けていたため、数多くの方が闇市場で食糧を購入していた。その巨大な需要量は一層闇市場の物価を上昇させた。1944年3月までに奉天の満系人口は約120万に達したが、そのうち一般配給を受ける人は46.7%（新京と哈爾濱は75%、）にすぎなかった。<sup>9</sup>配給を受ける人でも一人がヶ月間で僅か7kgの雑穀しか配給されなかった。一般的に大人一人ヶ月分の必用量が15kgと考えれば、配給量は必用量の半分も満たなかった。従って、食糧不足や闇市場は当時の市民としては避けられない問題であった。次に具体的な例を挙げて、奉天市民が如何に生活したかを明らかにしたい。

『関東軍憲兵隊報告書』に収録されている資料から見れば、関東軍奉天地方憲兵隊が何時から経済統制に対する不満の通信を押収するようになったかは分からないが、少なくとも1940年4月の段階での憲兵隊報告書の中で、経済統制に関する言葉は見られない。1941年4月、経済統制に対する不満の通信が3通押収されたが、「特に悪質なるものはなし」<sup>10</sup>と報告され、問題視していない姿勢が示されている。しかし、同年9、10、11月にこのような通信が9件、12件、15件と急激に増加したことに對して憲兵隊は、「満人通信中ニハ依然統制経済強化物資不足等ノ不平不満多ク生活不安一層深刻化ヲ窺知セラル、特ニ用注意通信ヲ認メス」<sup>11</sup>と嚴重に注意するよう呼び掛けた。そのため、その後の2年間に大量の奉天市内経済情報に関する通信が押収された。これらの通信は時期、発信人により多少違いがあったが、当時の奉天経済状況や市民生活の実態を記録したものである。

先ず、太平洋戦争前に押収された通信を見よう。

#### 例1

(発見月日：1941.5.27、発信者：ウェーラ、受信者：米国華カルフオルニヤ州桑港市カユガ七二ヒバルテル)

目下当地ハ住宅難テ貸家、貸室等殆ントアリマセン市内ハ溢ル、住民テ亦日本ヨリノ移民カ続々増加シテイマス・パン・麦粉・砂糖・米等皆強制配給テ砂糖ハ一ヶ月一家族僅カ八斤ニ制限サレテイマス

私達同胞ハトンナニカ渡米ヲ希望シテイルコトテセウ」<sup>12</sup>

#### 例2

(発見月日：1941.8.11、発信者：奉天小南関 T・ジョンソン、受信者：北京東四大街十一條胡同 H・カルエス)

「實際ニ食料品カ不足シテイルノカ或ハアル事情ヲ予期シテカ当局ハ食料品ノ消費節減ヲ企図シテイル

事実数日来食料ノ状態カ非常に困難ニナツテイル第一番ニ第三人ニ對スル小麦粉ノ配給カ停止サレ次ニ毎月ノ砂糖ノ割当量カ二珣カラ五百瓦ニ減少セラレタ牛肉ハ殆ト市場カラ姿ヲ消シ塩、米ノ類モ同様見当ラナイ種々ノ規則カ設ケラレタニモ拘ラス事実ノ価格ハ非常ニ騰貴シテ居リ下層中流階級ハ非常に苦ンテイル」<sup>13</sup>

#### 例3

(発見月日：1941.9.26、発信者：奉天市浪速通3ノ17 伊藤春治、受信者：東京市板橋区春日町2ノ569 高橋義則)

「目下奉天ニ居ル部隊テサヘモ相当ナ数テスカラ全滿至ル處ノ都市ニ増駐スル日本軍ハ實ニ膨大ナ兵力テセウ是等ノ軍隊ヲ維持スル糧食其他ノ軍需品ヲ供給セネハナラヌノテカラ滿洲ノ物資モ益々統制強化カ加ハルヘク一般民間ノ需要カ不円滑トナルコトハ当然テ吾々ハ凡テヲ耐ヘ忍ンテ難局ヲ打開セネハナリマセン…」<sup>14</sup>



#### 例 4

(発見月日：1941.9.29、発信者：奉天盛京医院 劉遇真、受信者：山東鄒縣南屯基督教会 育靈)

「当時ト比較□□其ノ差甚タシイモノカアリマス□前モ給料ハニヶ月ニ一回支給サレマスカコレニ土地カラ収獲ニナル糧穀ヲイレテモ衣類等ハ買ワヘマセン…實際ニ困ツテ居リマス地税カ過重テ一畝ニ付十数圓モ取ラレルシ其他物価ハ高騰シテイル住宅ハ壊レタノテ借家住居ノ状況ハ水マテ買ツテイル始末ソレニ加ヘテ外人ノ資産凍結ノ影響ヲ受ケテ教会維持費カ来ナクナリマシタ九、十月分ノ俸給モ恐ラク送ツテ来ナイセウソレテ今後ノ工作モ今ノ処テハ決定シテイナイ状態テス…」<sup>15</sup>

以上の例において、発信者の国籍は米国、日本、中国などそれぞれであるが、内容は大体奉天における生活が厳しいことを伝えている。例 1、2 は奉天に居住する外国人の目から見た奉天の市民生活像であった。

まず、住宅難の問題を取り上げたい。例 1 のように、人口が急速に増えたため、住宅難の問題が深刻化し、借家は探しにくくなった。1940年12月のある調査によると、市勢膨張のために、市民の住宅難は甚だしく、42,000戸不足していたという。そのうち、中国人は34,191戸、朝鮮系は1,222戸、日系は7,847戸をそれぞれ占めていた。その結果は大同元年の100万の人口基数に基づいて計算されており、もし新たに増加した人口を加えれば、不足はさらに深刻だと指摘されている<sup>16</sup>。そのような状況に対して、奉天市政公署は何度も満洲国中央建築局関係者・各特殊会社・協和会と打合会議を開いて、住宅問題について協議し、民営住宅の増建<sup>17</sup>や公営住宅建築補給制度<sup>18</sup>などの政策を立案したが、結局うまく解決できなかった。特に一部の「房閥」は、政府発布の賃貸法を無視し、ひそかに不法な権利金を要求して賃貸の秩序を攪乱させた。<sup>19</sup>このような投機行為は、もともと奉天市における厳しい住宅不足の問題をさらに深刻化され、市民生活に悪影響を与えた。また、食料については、小麦粉や米や砂糖など食品が強制的な配給となった。配給量が厳しく制限されているにもかかわらず、価格が非常に騰貴した。当時の満洲に住んでいる外国人は一般の中国人より良い生活をしているのが普通であったが、彼らにしても食料不足に陥り、一刻も早く奉天から離れ、帰国する決意を高めていた。例 4 は奉天の教会病院に就職していた人の生活状況である。給料は2ヶ月に1回の支給となり、生活が非常に困難になっていた。その上住宅が壊れたので、一切の物を買わなければならなくなった。さらに、外人の資産凍結のため給料が支給されず、物価の高騰に困って、未来は不透明な状態であると述べている。例 3 は在奉天の日本人の統制についての考えである。当時一般民衆に対する配給が円滑でなかった原因は奉天に駐在している龐大な日本軍にあると彼は考えた。当時、対ソ作戦準備のため、関東軍は満洲国に95万の兵力を動員した。51万の雇員を合算すると146万の人を満洲国へ進駐させた<sup>20</sup>。奉天市に駐在している兵員や雇員の数は具体的にはっきり分からない。龐大な軍隊の食糧及びその他

の軍需品を確保するために、一般民衆に配給すべき物資が軍隊に配分されたため物価を上昇させて市民生活に悪影響をもたらしたと例3は述べている。しかし、全体的に見れば、太平洋戦争の前の段階では、配給の不円滑及び物価の高騰により、中下層の市民生活は非常に苦しかったが、まだ何とか生活を維持することができるという状態であった。ただし、太平洋戦争勃発以後、市民生活は一層悪化し、食糧が極度に不足することになり、餓死者が出るほどの厳しい状況になった。次に1942年と1943年段階の市民生活状況を考察しよう。

#### 例5

(発見月日：1942.5.21、発信者：奉天市一心街2段59徑甫、受信者：龍口維新大街衛叔言)

「前略…現在奉天市内ノ商況ハ全ク不良テ各物ハ一律ニ政府ノ命ニ依リハ六月一日カラ米糠モ配給トナルソウテスカ為最近奉天市内各地ノ糧食ハ大變欠乏ヲ来シテ居リマス而シテソレラ品物ニハ相場ト言フモノカアリマセン皆闇市場テ取引カ行ハレテ居リマス」<sup>21</sup>

#### 例6

(発見月日：1942.5.19、発信者：奉天市北陵区安民街2段71、受信者：北京前門外西河口張鵬挙)

「目下奉天市ハ糧食ノ配給ハ異常ナル不足ヲ来シテ居リマスノテ私モ父上カソチラテ仕事ニ就カレタナラハ早速北京ノ方ニ行キ度イト思ツテ居リマス」<sup>22</sup>

#### 例7

(発見月日：1942.6.19、発信者：奉天淀町七丸一内 山崎彌七、受信者：京城太平通1町目25 立石孝信)

「前略…戦捷下ノ今次数年前ニ比シ物資頓ニ減シ配給機構モ或ルー方ニハ不円滑ヲ来シ居ル為市民甚タ迷惑ヲ蒙リ其ノ裏ヲカイト満系市民ハ商品ヲ暗ニ流シテ仕舞フノテ少イ商品カ尚少クナリ…奉天ハ最近日用品ニ至ルマテ売り切レ尽シ之カ為朝カラ買出シニ出掛ケテイル人モ少クナイトノ話日曜日市中テ物ヲ買ハウト思ツタラ大キナ間違ヒヲ起シ易イ様テス」<sup>23</sup>

#### 例8

(発見月日：1942.10.9、発信者：奉天市東関区小東街4段 徐某、受信者：北京東四隆福寺孫家坑41 徐三姐)

「現在奉天市ノ生活ハ日ニ増シ困難ヲ来シテ居リマス自分ハ毎月二百円ノ収入カアルカラヤット生活カ維持出来マスカー一切ノ糧食配給ハ頗ル不足ヲ感シテ居リマス一ヶ月中ニ配給サレル食糧ハ僅カ三日ヲ維持スルニ過キヌ其ノ他ハ総テ私買テアル数日前闇ノ高粱米ハ毎斤六十銭テアツタカ最近ハ新穀カ成熟シタノテ毎斤四十銭位テセウ諸般ノ情形ハ姉サンカ奉天ニ居タ時トハ大變ナ相違テス此ノ分テ行ケハ何時カハ凍餓ノ憂ヒカアリマス…云々」<sup>24</sup>

#### 例9

(発見月日：1942.10、発信者：不詳、受信者：不詳)

「従来豚ニ食ハセテ居タ豆粕ヲ現在テハ人ニ食ハセ非人道モ之迄徹底スレハ相当ナモノタ…闇ノ品物ハ我々ニ配給シテ呉レ、レハ斯シナニ困ル事ハ無イ闇ヲ利用スル者ト然ラサル者

ノ生活程度ハ甚タシク差異アリテ矛盾シアリ斯カル事象ハ早急是正セシメ円滑ナル配給ヲ要望ス…奉天ニハ民食不足シ代用食トシテ豆粕ノ配給アルモ将来ハ高粱粟糠等カ配給サレルタロウ」<sup>25</sup>

太平洋戦争の勃発により、いわゆる「一徳一心」の精神に基づいて、満洲国は直ちに日本の対英米戦に全力で支援する方針を決めた。1941年12月8日の深夜、溥儀は時局に関する詔書を発し、国力を挙げて「親邦」日本の戦を援ける旨を国民に伝えた。<sup>26</sup>その後、満洲国国務総理張景恵は対英米決戦体制を確立しようという談話を発表した。それらを受けて、満洲国各地の省長も相次いで「協力決戦」の決意、特に人、物資の集荷供出に努力する意志を表明した<sup>27</sup>。その後、奉天市長鄭禹は奉天市民に「友邦を追随し、聖戦に身を捧げる<sup>28</sup>」を呼びかけ、銃後報国の意識を以て全力で対日協力を要請した。12月20日、「戦時経済緊急経済方策要綱」が発表され、対日協力の戦時体制を満洲国経済政策の根本方針として確立した。物資の方面に於いては日本の戦争完遂に必要な物資を出来るかぎり提供することを原則とした。このうち、もっとも重要なものは糧穀であった。<sup>29</sup>満洲国は完全に太平洋戦争に陥り、日本の大陸兵站となった。戦局の拡大とともに、もともと物資不足の満洲国はさらに深刻となった。「米英開戦ニヨリ物資ハ益々入手困難ニナリ<sup>30</sup>」と憲兵隊も当時の社会状況を記述した。市民生活に対する配給は不円滑から配給量の減少、さらには配給不能に至った。市民の物資配給に対する不満も強くなり、政府対策の批判や反戦までに言及した。このようなことは憲兵隊が押収した通信の数量や内容に反映している。以上取り上げた例は太平洋戦争以降の奉天市民生活状況の真相を表すものである。

例5によると、1942年5月、各品物はすべて政府によって配給されるので、奉天市内の商況は全く不振であった。さらに、6月から米糠も配給しようとしたため、市民の糧食欠乏の恐怖感は一層強くなった。奉天市内各地の糧食は大変不足しているので、市民は皆闇市場で買うしかなかった。例6の人物は、奉天市の糧食配給が異常に不足し、生活ができなくなり、奉天から逃げ出す願望を抱き、父に助けを求めた。このような窮地に陥っている場面は例9及び後文に取り上げる例10・例16にも見られる。当時生活の困窮に堪えられず、奉天を離れたいと願う人が少なくなかったものと考えられる。

例7と例8は、数年前に比べて物資の配給量が減少したため、各物価がさらに騰貴し、市民生活がますます困難になり、闇市場の高価な食糧に依存しなければならなくなった状態を示している。例7の山崎は、物資の減少や配給の不円滑があるので市民に迷惑をかけているが、その裏に満系市民は商品を闇で流通させたため商品がさらに少なくなったと批判した。確かにそのように先を争って買う行為は物資不足の状況を激化させたものの、当時の物資不足と物価高騰の環境の下で、政府の危機管理をあまり信用していない中国人の考え方から見ると、彼らもやむを得ず物を手に入れたのであろう。物投機の商人は物資統制の秩序を乱せる元凶であったと考える。例9の人物はもし闇市場に流通している物資を市民に配ってくれば生活が改善できると期待した。しかし、物資不足と闇市場は緊密な関係を持っているの



で、それを根絶することは容易ではない。

例8の徐某が記述しているように1ヶ月に配給された食糧は僅か3日間の生活を維持するものに過ぎなかった。その他の生活必需品はすべて闇市場で買わなければならなかった。1942年にはいつ飢餓に陥るか心配している状況が生まれた。徐某は月給毎月200円の収入があったから、生活を維持することができるが、収入が少ない市民は豚に食わせる豆粕が主食になった。

#### 例10

(発見月日：1943.3.30、発信者：奉天市工業区 徳義祥、受信者：河南武安県午汲鎮西城)

「…更ニ奉天市ハ戸口カヤカマシクナカナカ入戸カ困難テアル。戸口ニ入ラナケレハ勿論食糧ハ配給カナイカラ若シ配給カナケレハ闇テ買ハナケレハナラストモ高クソレモナカナカ買ヘナイ其ノ他奉天ノ景況ハ甚タ困難テアルカ故ニ私ハ永ク奉天ニ落付クトハ思ツテ居ラヌ…」<sup>31</sup>

#### 例11

(発見月日：1943.3.31、発信者：奉天市大和区松島町中和興炭舗 孫仁香、受信者：山東東陽県江台村安仁堂西宅村 孫善慶)

「二月二十日□□ノ御手紙拝見事情ハ承知セルモ目下奉天市テハ戸口ノ調査ヲシテイル薪米ノ者ハ戸籍ヲ届ケナケレハ食糧ノ配給ハ受ケラレヌ…且ツ奉天ノ生活ハ非常ニ困難テアリ借家モ借リラレナイ一人ノ毎日ノ生活費ハ三四元以上ヲ要スルニ□錢(工費又ハ儲ケル金)ハ二三元ニ過キヌカラ故郷ニマリテ辛抱スルノカ第一テアル」<sup>32</sup>

#### 例12

(発見月日：1943.4.5、発信者：奉天市東関区小本街3段114号□□、受信者：山東省 陳葉元)

「奉天市内ハ目下非常ニ緊張シアリ毎日正業ナキ徒食者ハ全部捉ヘ汽車ニテ他ノ地方ヘ送りツ、アル、奉天市ノ食糧一斤二円余モスルノテ一人毎月百円ヲ要ス、家屋困難ナリテ関内ヨリ来奉シタルモノ数千人モ餓死ニナレリ…云々」<sup>33</sup>

#### 例13

(発見月日：□□、発信者：□□、受信者：北京本城遂安胡同 王遵侃)

「奉天市ニ於ケル生活ハ極メテ困難ナリ米一斤三円余リニシテ肉油等ハ全然購入出来サル状態ナリ豆腐一ケ麻雀ノ様ナモノ三錢豆油一斤ニ七円カ八円ニナレリ本當ニ可憐ノ状態ナリ」<sup>34</sup>

#### 例14

(発見月日：□□、発信者：□□、受信者：□□省巴縣大渡口猫鼻樑門片佳字九号 王家玉)

「目下食糧不足ニシテ毎日空腹ノ苦ヲ感ス配給不足ニシテ奉天市民ハ何レモ空腹状態ニ在リテ金アルモ食糧入手困難ナルノミカ高粱一斗ニ付キ三十元豆一斗四十元ナル故市内ニ於テハ金持ノ外ハ全ク方法ナシ…云々」<sup>35</sup>

例15

(発見月日：1943.5.18、発信者：奉天市大西区隆昌街1段6号 李某、受信者：陕西省□□鎮交東門裡 苗道生)

「前略…奉天ノ生活ハ實ニ困苦テス食料品ハ総テ官給テス大人ニハ毎日(ママ)十二斤小人ニハ九斤程度テス余分ニハ實ハレマセン配給品ノ値段ハ高粱米カー一斤十錢包米カー一斤十錢粟ハ十二錢程度テスカ闇相場ニハ高粱米カー一斤二圓五十錢メリケン粉カー一斤三圓程度テス市中ニハ豚ノ肉ヤ牛肉ノ配給ハアリマセンカ闇テハ一斤三圓八十錢位テス焼酒カー一斤八〇〇圓木棉製品ハ正當ノ売買カアリマセン家ハ一間ノ家賃八十圓見當テス…云々」<sup>36</sup>

例16

(発見月日：1943. 5.20、発信者：奉天市瀋陽区一心街2段24史韵鵬、受信者：天西安東大街天生園号 陸吉区)

「前略…妾カ奉天ニ在リテノ苦衷ハ貴方モオ察シノ事ト存ジマスカ此ノ頃ノ奉天ノ生活ハ一日毎ニ困難トナツテ行キマス以前ハ白米モ一斗五十圓テ買ヘマシタカソノ後六十圓余トナリ唯今テハ急ニ一百圓トナツテ仕舞ヒマシタ配給丈ケテハ足りナイノテス高粱米ヤ粟カー一斤カ三圓テ買ヘマス野菜類ヤ肉類モ同シ様ニ高クナツテキマスカ此ノ儘テ行ケハヤカテ金ハアツテモ買フ所カ無クナルテセウ妾カ今後只一人テ奉天ニ居ルトスレハ生活ノ維持ハ到底困難テセウ…云々」<sup>37</sup>

例17

(発見月日：1943. 5.20、発信者：奉天市大西区永安街1段3 萃山、受信者：天津市法界西関12号路茂業里340 羅葛成)

「奉天ノ配給ハ大人毎月十四斤小人七斤テ其ノ不足ハ全部闇テ買フノテス闇相場高粱カー一斤二圓四十錢粟カー一斤二圓八十錢包米粉カー一斤二圓四十錢白米カー一斤三圓三十錢メリケン粉カー一斤三圓二十錢尖餅一斤二圓二十錢然シ以上ノ品物モ金カアルカラテ手ニ入ラス有様テス而シテ近来奉天ノ手芸工業家ハ此ノ食糧難ノ為十分ノ七八失敗シテ例ヘハ満人ノ鉄工場及木工場テ以前ハ八千人位ノ工人カ働イテ居タカ今テハ其ノ半数シカ居ラナイ有様テス町ニハ最近日立ツテ乞食カ増ヘテキマシタ政府テハ又無職ノ者ハ嚴重ニ調ヘテ北滿ヘ労働者トシテ送り出シテイルカソレ等ハ何時帰レルカ判リマセン…云々」<sup>38</sup>

例18

(発見月日：1943. 5.25、発信者：奉天ニテ 王某、受信者：成都蒸魯公所華賢公寫 郭效汾)  
「粟一斗八十圓高粱一斗五十圓生活ハ非常ニ困難トナリ餓死ヲ待ツハカリテアル町テハ日々二、三十人ノ餓死者ヲ出シテイル…云々」<sup>39</sup>

例19

(発見月日：1943. 8.28、発信者：奉天市小南門 黄延棠、受信者：重慶市一路平安里 黄桂棠)

「奉天ハ現在現在物価カ特別ニ高イ。以前ニ比□□□倍ノ騰貴フリテマル。物ハ総テ配給

制□□□何モカモ不足シテイル。我々ハーヶ月ノ長イ間油ヲ食ツテイナイ。毎日ジャガ芋ハカリ食ツテイイル。ソレト云フノモ品□クテ買ヘナイシ又非常ニ高価ヲ為テス。即チ□□圓、以前ハ八圓テ二十斤買ヘタノタツタニ□□□貴シテイマス・・・」<sup>40</sup>

これらの例を見ると、1943年の奉天市の状況はさらに悪化したことが分かる。まず、戸籍の制限が厳しくなったことは例10と例11から伺える。奉天市の戸籍を持っていない人々には全く配給がなくなり、すべての必需品を闇市場で買わなければならなかった。一方、戸籍がある人には大人に毎月14斤小人7斤という標準で配給していたが、なかなか市民の日常生活を満足させることはできず、食料はほとんど闇市場に依存していた。例9の人物は「従来豚に食べさせていた豆粕を人に食べさせる」ことが非人道であると批判していた。ただし、1943年に入ると、その大豆や高粱は代用食糧から主食になり、価格も急速に上昇した。例8の高粱の闇価格は毎斤60銭であるが、例15、例16、例17では高粱の闇価格が毎斤3圓前後に騰貴し、ほぼ5、6倍になった。また、白米も一斗50圓から100圓になり、二倍高くなっていった。豚肉や牛肉などが配給されてないのですべて闇市場で高価で購入するしかなかった。従って、白米や小麦粉や肉などは言うまでもなく、雑穀も食べられない市民が多かったであろう。例19の黄某は一ヶ月の間に油をとらず、毎日ジャガイモばかりを食べて生活していた。

また、例11の孫某の場合、家を借りられなくても、毎日の生活費は三、四元以上が必要だった。しかし、給料は毎日二、三元しかもらえなかった。例12も一人毎月百円を要すると記していた。市民の収入によって生活状況が当然異なっていたが、これらの例から見ると、1943年の段階で食糧を購入するために少なくとも百円が必要だった。要するに、一般市民は食糧以外の生活必需品への支出が困難であったことが推測される。

これらの事例は有業者の生活の様子である、もし職を失ったら、生活はどうなるのか。例12によると、政府は正業がない徒食者を捕えて、汽車で他のところへ送った。例17では、政府は無職者を北満へ労働者として送り出している。例18では、生活は困難となり、町には毎日二、三十人の餓死者が出ていた。だからこれらの事例から見れば、社会最下層の人々が政府にどのように扱われたがある程度で示されている。

次に当時の日本人、特に軍の関係者や、満系の富裕層はどのように生活していたかをみよう。

#### 例20

(発見月日：1943.3.19、発信者：奉天市鉄西区鉄西陸宮114号ノ1田中寅松、受信者：東京市浦田区仲浦田3ノ16ノ1□□)

「其ノ後ノ妻子ノ様子ヲ御報告致シマス第一ニ奉天駅ニ到着シタ時駅ノ大キイノニ驚イテ居マシタ出迎ノ軍ノ自動車テ初メテ官舎ニ入りマシタソシテ先ツ白米一俵、醤油一斗、□□□、味噌約一貫五百匁、ウトン粉一俵、大豆、小豆約九升宛ソレニ砂糖三貫目渡シタ所目ヲ

ムイテ驚イテ居マシタ私ハオ前達ヲ迎ヘルニハ考ヘタ末ノ事タ心配セス台所ニ行ツテ見ロト  
言フト台所ニハ元月二十六日ニ渡満スル事ニナツテイタモノテスカラ先月分カ又右ニ書イタ  
丈入レテアリ其ノ外洗濯石鹼カ四十個、浴用石鹼カ三十個、味ノ素大罐二個、罐入食料品カ  
山ノ様ニ積ンテアリ酒類ハビールニ打清酒ハ□娘六升アリ流石ノ女房モ之ニハ吃驚シテ居ル  
目ヲ白黒シテ居マシタ

次ハ子供達ニオ前達ニモチャント用意シテアルト言ツテ奥ノ間ニ行キ菓子入ノ箱ヲ見□ル  
トコレ又吃驚リ、キヤラメル、落雁、氷砂糖、羊羹、ビスケット、勝調餅等カ密□箱ニ、三  
個半、全ク驚ル程アルノニハ早速手モ出サスニ驚イテ居リマシタ女房モ子供モコンナニ呑気  
ニ暮セルナラモツ早く渡満スレハヨカッタモウ奉天テ暮スト申シテ居リマス食料品日用品共  
何品ヲモ部隊カラ私カ通勤…」<sup>41</sup>

#### 例21

(発見月日：□□、発信者：熱河省凌源街馬通15 紀平国臣、受信者：東京市淀橋区大久  
保3ノ7 磯部検三)

「奉天市内ノ馬車馬モ高粱ヤ豆粕ノ配給カナイ為皆ヤセ馬トナリ毎日道路ヲ倒レタママ起  
キル事モ出来サル有様□馬□□月ノ飼育代百円也軍犬一頭□□円也□□立派ニ出セテモ馬車  
馬一日一円五十銭ノ飼育代カ出セストハ何ナヌ理由ナリヤ官憲ハ統制シテ良イ政治カ出来テ  
行ク様ニ思ツテイルカ知ランカ幾ラ首ヲ切ツテモ見テモ闇取引ノ撲滅ハトテモ出来ナイ戦争  
ヲシテイルカラ何か不足ト弱音ヲ吐イテハ何ニモナラヌ…云々」<sup>42</sup>

#### 例22

(発見月日：1943.5.18、発信者：奉天市松島町9ノ30 清水武夫、受信者：東京淀橋区柏  
木1ノ41 清水義夫)

「今ハ何ト云ツテモ軍属カー一番ヨイ様テ配給品モ豊富ニアリマスソレカラコレハ君カラ両  
親ニ言ツテ欲シイノテスカ全部満洲ニナレハ兵隊ノ方心配□□□□□□テ比較的□□□□  
□□給料ハ満警ニ較ヘテ問題□□□□共主食、日用品等大変安く入手出来□□良イ様ニ思ハ  
レマス私共モ常ニ軍ノ方ヲ羨シカツテ居リマス…云々」<sup>43</sup>

#### 例23

(発見月日：1943.6.4、発信者：奉天犬北街3段 張某、受信者：四川省沙平鎮)

「前略…当方ハ従前ト変リナク過シテイルカラ決シテ心配イラナイ生活ニツイテモ大シタ  
心配ハナイカ只各種ノ品物食料品ヤ衣類カ皆配給制度ニナリ配給ヲ受ケル人多イノテ貰フ  
ノハ容易ナ事テハナイ白米ヤ小麦粉ヲ食ヘタイト思ツテモ買フ所カナイ然シ現在私共ハ毎日  
白米ヤ小麦粉ヲ食ヘテイル之ハ適當ノ方法ニヨリ手ニ入レル訳タ今ハコウテモ今後ハトウナ  
ルカ判ラナイ村ノ土ハ何人モ敢テ耕作スルモノがカナイ一年分ノ収獲ハ悉ク諸税トナル…  
云々」<sup>44</sup>

#### 例24

(発見月日：1943.8.22、発信者：奉天市大和区霞町 菅場太郎、受信者：北安省通化海日

立警察署 大償田達造)

「一ヶ月ニ一週□□完全ニ米□□テ日曜日ハ全然米ナシ代用飯□□□ヤ「カボチヤ」ヲ食フ始末テ□□□会社ノ連中モ大低ソナナ状態ラシ□□値カー一升七、八圓カラ十二三圓、□□買ツタ方カ外食スルヨリ経済的タト□□□□末テス最近ハ馬鈴薯サヘモ仲々手ニ入ラス何ヲ□□ヘタラ良イカト思案投首ト云フ状態テ□□之テハ戦争ニ勝ツテモ国民カ腹ヘ□□□テ了フノテハナイカトサヘ云ハレ□□ス 後略」<sup>45</sup>

これらの例から見ると、物資は欠乏していても、軍隊および軍隊関係者、その他富裕な者は必要な物資を入手することが難事ではなかった。軍事優先のスローガンのもと、民衆は自らの食糧を節約し、軍需品の充実をはかった。一般の市民が毎日飢餓と死亡の間に徘徊していたが、一部の軍人は贅沢な生活をしていたことも現実であった。例20の田中は軍用の汽車で渡満した妻を官舎に迎え入れた。妻は眼前に現れた豊富な物資の前に何度も驚いた。白米、醤油、味噌、砂糖乃至ビール、酒など闇市場でもなかなか買えないものが田中の台所には大量に置かれていた。洗濯石鹼、浴用石鹼、味の素など生活用品も各種取り揃えてあった。さらに、子供が大好きなお菓子や羊羹など甘味も用意されていた。だからこそ、田中の妻はもっと早く渡満すれば良かった、と奉天の生活に大満足であった。

軍人の家族の配給が優先されただけではなく、戦時下では軍馬も普通の馬より優待された。例21には、奉天市内の馬車馬は高粱や豆粕の配給がないため毎日のように道路で倒れていたのに対して、軍馬には一ヶ月百円の飼育代が出されていたこともあった。日本人も、何故馬車馬に一日一円五十銭の飼育代を出せないのか、理解できなかった。これは戦時下の配給優先順位を見ればすぐ理解できる。

軍隊の需用は第一階級に置かれているため、あらゆる資源は軍に傾斜配分された。例22で述べられているように「現在は何といたっても軍属が一番良い様で、配給品も豊富にあった」。日系の奉天市民も常に軍属の優遇を羨望していた。

当時すべての日系奉天市民が良い生活をしていただけてはいない。例24の菅場及び彼の同僚

表2 戦時統制配給順位

第一階級	軍隊の需用	戦闘部隊の需用
		兵站の需用
		軍事行政機関の需用
第二階級	戦時経済の需用	軍需工業の需用
		軍需労働者及び救護者の職業被服や糧食
		軍需工業給付増大及び原料獲得のための需用
		交通機関の需用
第三階級	一般民需	軍需工業のための試験所及び研究所
		生物学的需要
		心理学的需要

注：椎名悦三郎『戦時経済と物資調整』（産業経済学会1941）、384頁。



たちは米を毎日食べられた訳ではない、満系の市民に比べれば良い生活をしてきた。しかし、ついにジャガイモもなかなか手に入らなくなると、彼は戦争に勝っても国民は空腹のままではないかとの「聖戦」意義を反省し始めた。

一方、満系市民の中にも良い生活をしている人がいた。他の満系市民が高粱等代用食も食えない際に、例23の張某は「適当の方法」で毎日白米や小麦粉を食べていた。しかし、彼も今後の状況はどうなるか分からなかった。富裕層は闇市場でいいものを購入し、普通の市民より一時的に良い生活をしてきたが、戦時下の環境は変わりやすいため、彼らも将来に期待しないまま日々を過ごしていた。

## おわりに

本稿では主に『日本関東憲兵隊報告集』の資料を中心に日中戦争期の奉天市民の生活実態を考察した。戦局の拡大によって、市民への物資配給が変化したこと、日満配給差別の問題や闇市場の状況などを明らかにした。

太平洋戦争前の段階でも、奉天の物価はすでに高騰した。配給も不円滑であるため、市民は物資不足に苦しんだ。しかし、米や小麦粉の配給が時々あり、代用食品高粱や大豆粕などの配給はそれほど不円滑ではなかった。市民は我慢していけば、なんとか生活を維持することはできたようである。

太平洋戦争の勃発により、日本の満洲からの物資徴収がさらに拡大したため、奉天の物資不足問題はますます悪化した。市民への配給量は段々少なくなり、必要量の三分の一にも満たなかった。配給食糧の種類は高粱や粟などの雑穀に集中した。米や小麦粉の配給が中止された。奉天の戸籍がない者は配給を受けられなくなった。配給日には朝三時頃から起きて配給店の前に並ばなければならず、一寸遅れても配給がもらえないことがあった<sup>46</sup>。市民は餓死を避けるために、闇市場の高価な食糧に依存した。月給を全部使っても一ヶ月分の雑穀を買えず、少しお金があっても、必要な物を入手できなかった。市民はほとんど毎日空腹を感じながら日々を過ごしていた。また、日、鮮、満の間に配給差別があった。一般市民は餓死に瀕していたにもかかわらず、軍人や軍属は相変わらず贅沢な生活を過ごしていた。これらの差別は、日本が宣伝していた「五族協和」や「日満一如」の実態であると考えられる。

## 注

- 1 L・ヤング『総動員帝国』（岩波書店2001）、第9頁。
- 2 塚瀬進『満洲国「民族協和」の実像』（吉川弘文館、1998）、第157-159頁。
- 3 田中隆一『満洲国と日本帝国の支配』（有志舎、2007）、第170-202頁。
- 4 『日本関東憲兵隊報告集』は吉林档案館に保存して居る日本関東軍司令部档案の中から選ばれた「通信検閲月報」、「思想戦情報月報」、「軍事警察月報」、「軍紀風紀月報」等諜報を編集した資料集である。本文に使われている資料は主にその中の「奉天地方通信検閲月報」、「奉天特別室大野月報」、「奉天特別室

- 業務月報」などを中心としている。年代としては、1941年5月から1943年10月の間に限定している。
- 5 満洲国通信社編「満洲物価の動向」『満洲国現勢—康德8年版』（クレス出版）第25頁。
  - 6 同上。
  - 7 同上。
  - 8 「満洲国物価統制の現段階」『満洲国現勢—康德6年版』、第349頁。
  - 9 満洲中央銀行調査部『全満都市の生活必需品物資配給事情と闇価格問題』、1943年7月、第42頁。
  - 10 吉林省档案館編『日本関東憲兵隊報告集（第三輯）』8（広西師範大学出版社、2005年10月）、第292頁。
  - 11 同上、第502頁。
  - 12 同上、第306頁。
  - 13 同上、第423頁。
  - 14 同上、第462頁。
  - 15 同上、第476頁。
  - 16 「房荒—人口膨脹住宅難、缺4萬餘戸」『盛京時報』、1940年12月1日。
  - 17 「預想明年人口仍増、決建房5萬餘戸」『盛京時報』、1940年12月17日。
  - 18 「解消住宅困難—建築局提出公營住宅建築對策」『盛京時報』、1941年7月12日。
  - 19 「掃除房罰把持租價、奉市設立統制組合」『盛京時報』、1941年9月5日。
  - 20 この関東軍演の詳しい状況について、芳井研一「関特演の実像」に参照する。国際ワークショップ『日中戦争の深層』論文集に掲載。
  - 21 同上、第598頁。
  - 22 同上、第599頁。
  - 23 前掲、『日本関東憲兵隊報告集（第三輯）』9、第15頁。
  - 24 同上、第190頁。
  - 25 吉林省档案館編『日本関東憲兵隊報告集（第一輯）』17（広西師範大学出版社、2005年10月）、第112頁。
  - 26 「大東亜戦争と満洲経済」、『満洲国現勢—康德10年版』、第340頁。
  - 27 「回應總理談話、各省長闡明協力決意」『盛京時報』、1941年12月10日。
  - 28 「追隨友邦、挺身聖業」『盛京時報』、1941年12月10日。
  - 29 「大東亜戦争と満洲経済」、『満洲国現勢—康德10年版』、第341頁。
  - 30 吉林省档案館編『日本関東憲兵隊報告集（第二輯）』4（広西師範大学出版社、2005年10月）、第197頁。
  - 31 前掲、『日本関東憲兵隊報告集（第三輯）』9、第262頁。
  - 32 同上、第260頁。
  - 33 同上、第332頁。
  - 34 同上、第332頁。
  - 35 同上、第333頁。
  - 36 同上、第354頁。
  - 37 同上、第357頁。
  - 38 同上、第360頁。
  - 39 同上、第361頁。
  - 40 同上、第392頁。
  - 41 前掲、『日本関東憲兵隊報告集（第三輯）』9、第261頁。
  - 42 同上、第338頁。
  - 43 同上、第368頁。
  - 44 同上、第19頁。

45 同上、第393頁。

46 同上、第103頁。